

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

玩具にみる日本の近代史：
アメリカへの複雑なおもい：共同研究：
モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的
研究：
国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 是澤, 博昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008495

玩具にみる日本の近代史 —アメリカへの複雑なおもい

文
是澤博昭

共同研究 ● モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究—国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に
(2014-2017年度)

昨年度の成果

昨年度は、これまでの研究成果をもとに各共同研究員が、それぞれの専門分野と研究テーマを深化させた発表を行った。また昨年度に続き国立民族学博物館が所蔵する多田コレクション（以下、民博資料）を補う内容をもつ長野県諏訪市の諏訪市博物館所蔵高見商店資料に関する研究会及び現地調査を実施するとともに、「続・下町の空想画家 小松崎茂」展を開催した荒川区立ふるさと文化館の関係者を招聘し、おもに展示という側面に注目して研究会を開催した。

前者は、1950（昭和25）年から1955（昭和30）年まで営業していた「〇一（まるいち）高見商店」の売れ残り品を保存したものであり、精密機器の製造が盛んになった頃の、信州の地方都市の賑わいが漂う6,477点の玩具類である。それとほぼ同時代に活躍した小松崎は、少年雑誌の口絵、プラモデルの箱絵などに軍艦や戦闘機・未来兵器などを描き、少年の心をとらえた挿絵画家だ。

民博資料には、1942（昭和17）年頃北陸の露店商が所持していた11段重ねの木箱に収納された玩具がある。縁日を渡り歩き販売したものらしく、それらの商品には戦時中の玩具の特徴も色濃く反映されている。戦後間もない高見商店資料と小松崎の作品は、それにつながるものとして位置づけられる。子ども関連用品が質量ともに充実する高度成長期（1950年代半ばから1970年代初期）以前の、子どもの生活用品があまり残っていない時代の資料の発掘と調査を進展させたことも、昨年度の成果であった。

軍国少年少女の誕生

さらに資料調査にも進展がみられた。民博資料には世相を反映させた数多くの玩具類が残されているが、そこには文献だけでは容易にみることができない人々の生活意識が映しだされている。1920年代後半から30年代にかけて、純粋無垢な子どものイメージは大衆化し、平和友好という語と融合することで、大衆意識を国家戦略へ誘うイベントにまで成長する（是澤2017b）。その一端は面子や双六、カルタの絵柄などにもあらわれているが、満州事変から日中戦争、日米開戦までの期間は、興味深い様相を呈している。

1920年代は、大正天皇・皇后の御真影を拝戴しても、それをほとんど放置に近い状況にした学校現場があるなど、国民の間には国家観にも温度差があり、子どもの世界ではなおさらであった。しかし1930年前後に大衆的

な展開期に入ったマスメディアは、国民全体を軍国主義へと誘うイデオロギー装置として、子どもの心まで支配するようになってきた。当時の小学校高学年の多くの子どもたちに、日本のアジア支配を正当化する国民的使命が次第に刻み込まれようとしていたのである。

このようなイデオロギーを身につけた要因を小学校高学年から中学校前半の子どもにあてはめて考えてみると、学校、新聞や家庭だけではなく、少年少女雑誌、とくに『少年倶楽部』（1914年創刊）『少女倶楽部』（1923年創刊）を中心とする雑誌の力が大きかったことがわかる。1930年前後、70万部を超える雑誌へと急成長した『少年倶楽部』は、仲間内での回し読みやバックナンバーの保存が当たり前だった時代に圧倒的多数の子どもたちによって愛読された。山中峯太郎『敵中横断三百里』（1930年）や『亜細亜の曙』（1931～2年）など、戦争に関する内容を描き愛国精神を高揚する小説が少年を魅了した。そして軍事評論家の平田晋策の『われ等若し戦はば』（1933年）など、恐ろしい仮想敵としてのアメリカのイメージを読物の形で少年少女の心に浸透させたのである。

アジアの盟主としてアメリカに対峙して東洋の平和をまもる日本の軍隊は、子どもたちの憧れの題材だ。子どもたちが心を躍らせながら面白く読むうちに、『少年倶楽部』が発信するアジア認識と欧米への対抗意識が、知らず知らずに学校教育の外で刷り込まれた。いわゆる15年戦争のはじまりとともに、日本のアジア侵略を正当化する軍国少年少女は誕生していた。やがて彼らが成長し、青年として戦時体制を支えたのである（是澤2017a）。

民博資料からみる戦争

1930年代は、時代を反映して数多くの戦争を題材とした玩具が製造販売されたが、それらは民博資料にもコレクションされている。ただし民博資料を熟覧すると、このような単純化されたイメージだけでは説明しきれないアメリカに対する複雑な庶民の意識を、子どもの遊び道具から垣間みすることもできる。たとえば、1932年の上海事変の際、点火した爆弾ごと敵陣に突入した肉弾三勇士は愛国美談として宣伝された。三勇士関連の玩具も多いが、『少年倶楽部』の人気漫画のらくろの面子「肉弾のらくろ一勇士」などは、それに便乗したものであろう。またリットン卿を載せた「国際連盟会議」の面子や「武藤全権 新京入城」「多門中将 石本救出隊」など一連の面子セットは満州国承認前後と推測される。



着物姿のベティ（多田敏捷編『おもちゃ博物館』第24巻28頁、京都書院）。着物の模様が目黒伊の国旗となっている。

1935年には溥儀の来日を記念して、「満州国皇帝御来朝奉仰」10枚1組の面子が発売されている。また1940年の日独伊三国同盟締結後だろうか、ヒトラー、ムッソリーニの他、満州国・ドイツ・イタリア・ルーマニア・新支那・大日本などの国旗を印刷した32枚1組の面子などもある。「樞村機決死ノ体当たり」「山西山地大激戦」などのセットは日中戦争当時のものか。民博資料



日本軍姿のミッキー（裏）、（表）（民博所蔵 D762）。



日本軍姿のポパイ（裏）、（表）（民博所蔵 D762）。



にはこの時代のものがとくに多く、「脇坂部隊南京城一番乗り」「雁門関ヲ占領ノ皇軍」などの角面子、「松井最高指揮官」「無冠ノ戦士新聞記者」「共産党 蒋介石生捕り 全滅」の人型に印刷された面子など、多種多様なものがあり、その時代の人気があらわれている。

「抜取親子 相撲面子」という力士の図柄の面子もその一つであり、彼らの化粧まわしには航空機、戦車、武運長久、日章旗、鉄兜に銃などが描かれている。背面にある力士の名前から1937年発行のものと推測されるが、それは同年3月、戦時の国防目的達成のために人的・物的資源を統制、運用することを目的に「国家総動員法」が制定されたことなどにも関係するのだろう。

軍隊と融合するアメリカのキャラクター

国際的孤立と排外熱が高揚するなか、子どもの玩具もナショナリズム一色に飲み込まれていくようだが、意外にもこの時代の玩具の絵柄には、ミッキーマウスやベティ・ブーブなど、アメリカのキャラクターが多い。

たとえば、前述の三国同盟締結後の満州国・ドイツ・イタリア・新支那・大日本などの国旗を印刷した面子の裏面をみると、満州国の裏はミッキーマウスであり、大日本のそれはベティである。「新案連続漫画ミッキーの陸軍」には日の丸を掲げる日本兵に扮した沢山のミッキーマウスが描かれている。ベティはセクシーなキャラクターで、その関連商品は全世界で発売されたが、先の「肉弾のらくろ一勇士」とほぼ同時期のものと推測される面子の図柄にも用いられている。さらに1932年頃設立された大日本国防婦人会のたすきで出征兵士を見送るベティの塗り絵などもあり、ここにはアメリカの人気キャラクターが日本の軍隊と融合しているのである。

1924年の排日移民法の成立によって高まる排米熱は、1930年代の日本の中国侵略へのアメリカの干渉を経て、日米開戦とともに頂点に達する。ベティの映画は、1930年代から日中戦争が激化する1938年頃までに輸入されたというが、まだ1930年代前半は、子どもの遊びの世界ではアメリカのキャラクターなどにも寛容であったかもしれない。

ミッキーとポパイの日本兵

そこで将校姿のミッキーとポパイを模った面子をみてみよ

う。この資料の特徴は製作年代をある程度特定できることだ。日本兵の格好をしたミッキーとポパイの姿も意外だが、その裏面には進軍の歌と露営の歌が印刷されている。これらは1937年東京日日・大阪毎日新聞社が戦意高揚のために募集した歌詞であり、露営の歌は、B面ながらA面の進軍の歌を上回る人気であった。「勝つて来るぞと勇ましく誓つて故郷をでたからは…」ではじまる歌詞は、時代を象徴する歌として今日でも有名だ。したがってこの面子は1937年以降、日中戦争がはじまった頃に製作されたことがわかる。

政治の世界では対立する日本とアメリカだが、日本の子どもの遊びのなかでは両者が見事に融合している。日米開戦後、排米熱が頂点に達する間際であっても、民間ではまだアメリカへの憧れは強く、それが子どもの玩具にも映しだされているのだ。

排米と排米はその時々政治情勢と結びつき変動を繰り返すが、生活文化レベルでは日本人は一貫してアメリカ文化を歓迎し、それを日本化させた。そして事実上日米開戦の日まで、アメリカ映画は日本に入りつつづけたことは、すでに指摘されている（亀井 1979）。そこには圧倒的な物量の差におののき誇大妄想ともいえる精神主義に拠る所を求め一方で、それでも欧米世界への憧れを捨てきれない、近代日本の複雑な心性が映しだされている。それをあらわすものの一つが、敵国アメリカを代表するディズニーのキャラクターが日本兵の姿で戦意高揚の歌を宣伝する玩具なのである。

【参考文献】

- 亀井俊介 1979『メリケンからアメリカへ 日米文化交渉史覚書』東京：東京大学出版会。
- 是澤博昭 2017a『「少年倶楽部」と日本学童使節——軍国少年少女誕生背景』『渋沢研究』29: 87-108。
- 2017b『日本学童使節のイベント化とその政治的利用——満州国と少女・少年』『国立歴史民俗博物館研究報告』206: 129-162。

これさわひろあき

大妻女子大学准教授。専門は児童文化史（主に子どもに関わる生活文化・節句行事等の研究）。著書に『教育玩具の近代』（世織書房 2009年）、『青い目の人形と近代日本』（世織書房 2011年）、『決定版日本の雛人形』（淡交社 2013年）他。近著に『満州国と子ども——軍国少年少女はどのように誕生したか』（世織書房 2017年）。